

『泥棒と人さらい』

志井永子

18枚 4742文字

あらすじ

大学生の清美は毎月、愛犬が轢かれた場所に水と花を供えている。ネグレクトされている杏奈が水を盗んだ。清美は叱るが、杏奈は一切声を発さず、祖母の家に連れて行って欲しいと伝える。清美は杏奈を連れて行く事になるが、実母と継父が追って来る。清美は警察沙汰にするため、あえて殴られようとする。

○住宅街・駐車場の脇（昼）

枯れた一輪の花と、ペットボトルの水が供えられている。

水を取る子供の手。

手の主は、リュックを背負った篠村杏

奈（6）。フタを開けようとするとき……

水を奪われる。

奪ったのは、一輪の花を持った大内清

美（20）だ。

清美「アンタのやってることは泥棒だよ」

杏奈、土下座をする。

ギョツとする清美。周囲を気にしながら

ら杏奈を起こす。

清美「ちよっ、何してんの？ やめて」

杏奈、清美の手にある水を見つめる。

清美「これは先月供えたヤツだから、こっち」

と新しい水を差し出す。

杏奈、かぶりを振る。

清美「ほら、私のおごり。百三十円」

チョココンと頭を下げる杏奈。水を受け

取って、フタを開けようとする。が、かたくて開けられない。

杏奈から水を奪う清美。フタを開けて、ぶっきらぼうに杏奈に押し付ける。

水を飲む杏奈。爪が伸びている。

清美「切りな、爪。伸びてる」

杏奈、無視して水を飲んでいる。

清美「一丁前に伸ばしてんだ。レディだね」

清美、髪の毛を耳にかける。

拍子に、ビクツと防御姿勢になる清美。

清美「……イジメられてる？」

杏奈、かぶりを振る。

清美「イジメられてない？」

杏奈、かぶりを振る。

清美「幼稚園で？」

杏奈、かぶりを振る。

清美「学校で？」

杏奈、かぶりを振る。

清美「何？ 分かんない……おウチで？」

杏奈、うつむく。

清美「児童相談所って何番だっけ？」

とスマホを出す。

杏奈、スマホを奪い取る。

清美「自分でかけられるなら自分でどうぞ」

清美の顔にスマホを向けてロックを解除する杏奈。スマホを操作して、清美に突きつける。

○スマホ画面

メモ帳に、『おばあちゃん』とある。

○住宅街・駐車場（昼）

杏奈の差し出しているスマホを、清美が凝視している。

清美「おばあちゃんがイジメてんだ」

かぶりを振る杏奈。ちょうど通りかかったタクシーを指す。

清美「タクシー？」

杏奈、うなづく。

清美「……おばあちゃんちに行きたいのか」

杏奈、うなづく。

清美「悪いけど、私、大学があるから」

と杏奈の手からスマホを撮って、去る。

○バス停 A (昼)

バスを待っている清美。一輪の花を持っている。

杏奈、やって来て清美の手を握る。

清美「離して」

と手を離す。

両手で清美の手を握る杏奈。

○スマホ画面

犬の写真、写真、写真……

清美の声「可愛いでしょ？ アイビーのお供物だよ、アンタが盗んだ水は」

○バス車内 (夕)

並んで座っている清美と杏奈。

スマホを見ている杏奈。視線を清美に

移す。

清美「轆かれたんだ。おばあちゃんの車に」

杏奈、清美の手を握る。

清美、手を離す。

清美「慰めてくれなくて結構……て言うか、

供えるの忘れちゃった」

と花を見つめる。

杏奈、窓外を指す。

指した方に、蕎麦屋がある。

清美「おばあちゃんち、お蕎麦屋さんか」

○蕎麦屋・店内（昼）

入って来る清美と杏奈。

杏奈、食券機の前に来る。

清美「お腹が空いてるだけ？ え？ え？

え？ もしかして私が払うわけ？」

杏奈、うなづく。

清美、渋々と財布を出す。

清美「アンタのおばあちゃんに返してもらおう」

杏奈、かぶりを振る。

清美「おごらせるわけ？」

杏奈、うなずく。

清美「（ため息）どっちのおばあちゃんに会いたいの？ お母さんのおばあちゃん？」

杏奈、かぶりを振る。

清美「お父さんのおばあちゃんか」

杏奈、かぶりを振って、手を差し出す。

清美、怪訝そうにスマホを渡す。

杏奈、スマホを操作して清美に返す。

○スマホ画面

メモ帳に、『ばばのおばあちゃん』とある。

○蕎麦屋・店内（昼）

食券機の前に立っている清美と杏奈。

清美「パパのおばあちゃん……お父さんのおばあちゃんでしょ？」

杏奈、かぶりを振る。

清美「……そっか、パパとお父さんは別人か」

杏奈、うなずく。

清美「そんなに会いたいもんかね、おばあちゃんなんか」

杏奈、深くうなずく。

清美「私は大嫌い。お墓参りも行っていない：
：お蕎麦？ うどん？ どっちにする？」

『カレー500円』を指す杏奈。

○老人介護施設・エントランス外（午後）

並んで立っている清美と杏奈。

対面に、介護職員の伊東武（35）が
立っている。

杏奈、スマホを操作している。

清美「すみません、無口な子で：：」

杏奈、スマホを伊東に見せる。

伊東、スマホと杏奈を交互に見て、

伊東「酒井香苗さんってことは：：杏奈ちゃんか！ 大きくなったねえ！」

清美「杏奈って言うのか」

伊東「ごめんね。酒井さんは：：おばあちゃ

んはいらっしゃらないんだ」

清美「死んじゃったの！？　この子の前で言わないでよ！」

伊東「一時帰宅してるだけです」

清美「……すみません。早とちりでした」

プツと笑う杏奈と、バツが悪そうな清美。

伊東「お喋りな子だったんですけどね」

清美「……喋れなくなっただんだと思います」

伊東「本当におばあちゃんに会いたい？」

杏奈、うなづく。

杏奈から少し離れた所に、清美を連れてゆく伊東。

伊東「知らなくていいこともあるんです。杏

奈ちゃんのパパ、再婚してて……」

横で、杏奈が聞いている。

伊東「……知られちゃいました」

○バス停 B（午後）

伊東と向かい合っている清美と杏奈。

伊東「個人情報のアレとかあるから僕が教え
たって言わないでね。じゃ、さようなら」

と杏奈にメモを渡して、去る。

杏奈、ペコッと頭を下げる。

バスが停車する。

清美「メモを運転手さんに見せて」

杏奈、うなづく。

清美「降りる場所を教えてくださいから」

杏奈、うなづく。

清美「バスを降りたら分かるよね？ おばあ

ちゃんちまで」

杏奈、うなづく。

清美「じゃ」

と去る。

杏奈、小さく手を振る。

立ち止まって振り返る清美。

杏奈、手を振り続けている。

清美、杏奈の元に戻る。

清美「お金ないんでしょ？」

○バス・車内（午後）

並んで座っている清美と杏奈。

停車してアナウンスが流れる。

清美「着いたよ。私はここまで」

杏奈、立ち上がって、清美に手を振る。

清美「早く行きな」

チョココンと頭を下げる杏奈。

○バス停C（午後）

バスから降りる杏奈。

杏奈の前に、篠村京香（29）と篠村

翔太（22）が立ちほだかる。

ギョツとする杏奈。後退りする。

翔太「おお、いたいた」

京香「やっぱここか」

翔太「勝手に出歩くなっつってんだろ」

京香「悪いことしたらどうすんの？」

杏奈、土下座をする。

清美、バスから降りる。

清美「立って。そんなことしちやダメ」

と杏奈を立たせる。

翔太「何だ、お前？」

清美「返してもらえます？ カレー代」

京香「アンタがウチの子を連れ回してんだ？」

清美「お宅の子が私を連れ回してるんです」

翔太「お前のやってることは人さらいだぞ」

清美「だったら警察呼んだ方がいいですよ」

翔太「そうさせてもらうわ」

とスマホを出す。

京香「ヤバいって」

翔太「そっか。ほら、行くぞ」

と杏奈の手を握る。

杏奈、清美に助けを求めるような目。

清美、翔太から杏奈を引き剥がす。

清美「杏奈の身代金、六百三十円です」

翔太「コイツにそんな価値ねえから」

清美「カレーと水を買うお金ぐらいあるでし

よ？ こんな時計してるんですから」

と翔太のスマートウォッチを触る。

翔太「触んじえねえよ、人のモン」

清美「人だったんですね。獣だと思いました」

翔太「てめえ、ナメてんのか？」

清美「獣でも自分の子に飲み物ぐらい与えるか。アンタたちは人の形をしたゴミですね」

と翔太の頭をポンポンと触る。

翔太「今、二発殴ったよな？」

清美「やり返せばいいじゃないですか」

翔太「女だからって手加減しねえから」

清美「子供にも手加減しなさそうですね」

翔太「てめえ……」

翔太、拳を振り上げる。

京香、翔太の拳を制止して、

京香「ダメだって。警察が来る」

翔太「あ？ てめえから殴ってやろうか？」

京香「……ごめんなさい」

と後退りする。

翔太、清美を睨む。

翔太「二発だからな、二発」

杏奈、両腕を広げて、清美の前に立ち
はだかる。

清美「どいて」

杏奈、かぶりを振る。

清美「杏奈、どいて」

杏奈、かぶりを振る。

清美「杏奈？」

翔太を睨みつける杏奈。

翔太「何だ、その目は？」

清美「私を守ってくれるんだ？ 他人なのに」

杏奈、うなずく。

清美、京香に向かって、

清美「アンタは守ってもらえなかったね、母

親なのに」

京香「好きで母親やってるわけじゃないから」

杏奈、ハツとする。

清美「杏奈の前で言うことじゃないでしょ：

：ほら、殴りな、ほらほら：：ほら！」

翔太「その手に乗るか、バーカ」

京香「帰ろ」

京香と翔太、去る。

清美、翔太と京香の背中に向かって、

清美「児童相談所に連絡しまーす」

京香、振り返る。

京香「勝手にして。いけないから、ソイツ」

清美「……ごめん、余計なことしたかも」

杏奈、微笑んでいる。

清美「よかった、喜んでもらえて」

○酒井家・庭（午後）

日陰で、イスに座っている酒井香苗

（70）。

横のテーブルに水が置かれている。

清美の声「勝手に入ったらマズくない？」

杏奈はズカズカと、清美はおずおずと
やって来る。

香苗を見つける杏奈。清美の手を振り
解いて、駆け寄り、香苗に抱きつく。

香苗「杏奈？ 大きくなったねえ！」

香苗、清美を見て、

香苗「杏奈？ 大きくなったねえ！」

清美「いいえ、私は杏奈じゃないです」

香苗「杏奈もこっちにおいで」

清美「ですから私は……」

杏奈、清美の手を引いて香苗の元に連れてゆく。

香苗「カレー作ってあげる。甘口のカレーがいいんだよね？」

女性の声「お義母さん？　こまめに飲んでくださいよ、お水」

香苗「はい！　水飲み水飲みって、杏奈がうるさいの」

杏奈、テーブルに置かれている水を香苗に差し出す。

香苗「爪が伸びてるね。切ってあげる」

香苗、右手で杏奈の手を取る。

香苗「爪が伸びてるね。切ってあげる」

香苗、左手で清美の手を取る。

清美、両手で香苗の手を握る。

清美「ねえ、おばあちゃん、私ね……」

香苗「今度、孫が生まれるんだよ。名前はもう決めた。杏奈」

女性の声「お義母さん。お水、残ってますか？　今、持って行きますね」

杏奈、声の方を交互に見る。

清美「おばあちゃん、あのね、私……」

杏奈にバッグを引っ張られて、去ってゆく清美。

○バス・車内（午後）

並んで座っている清美と杏奈。

清美「よかったね、会えて」

杏奈、笑顔でうなづく。

清美「でも、みんな杏奈だったね」

杏奈、笑顔でうなづく。

清美「杏奈も杏奈、私も杏奈」

杏奈、笑顔でうなづく。

清美「さっき、女の人の声が聞こえたじゃない？」

杏奈、ブンブンかぶりを振る。

清美「ん、聞こえなかった聞こえなかった」

杏奈「……アイビーのおばさん」

清美「喋れんのかい」

杏奈「お父さんとママが声出すなって」

清美「もう言いつけは守らないのか」

杏奈、うなづく。

杏奈「アイビーのおばさん……」

清美「（遮り）お姉さん」

杏奈「アイビーのお姉さんの名前って……」

清美「（遮り）私、おばあちゃんのことが大嫌いなんだ。アイビーを轢いたから」

清美と手を繋ぐ杏奈。

杏奈「痛い」

と繋いだ手を離す。

清美「おばあちゃん、アイビーに向かって叫んでた。私の名前を。清美、清美って。あの日からよく間違えるようになった」

清美、手の平を見つめる。

清美「今でも許してない……でも思い出しちゃった、好きだったってこと」

杏奈、リュックから飲みかけの水を出して、差し出す。

清美「ありがとう……って言うか飲みかけ。
しかも私があげたヤツ」

○バス停D（夕）

バスから降りる清美と杏奈。

○霊園（夕）

立っている杏奈。視線の先では……
『大内家之墓』に花と水を供えて、手
を合わせる清美。

○霊園からの道（夕）

並んで歩いている清美と杏奈。

清美「児童相談所にかけるよ？」

とスマホを出す。

杏奈、うなづく。

清美、スマホをしまう。

清美「やっぱ連れてく。ほら、手」

杏奈と手を繋ぐ清美。

（了）